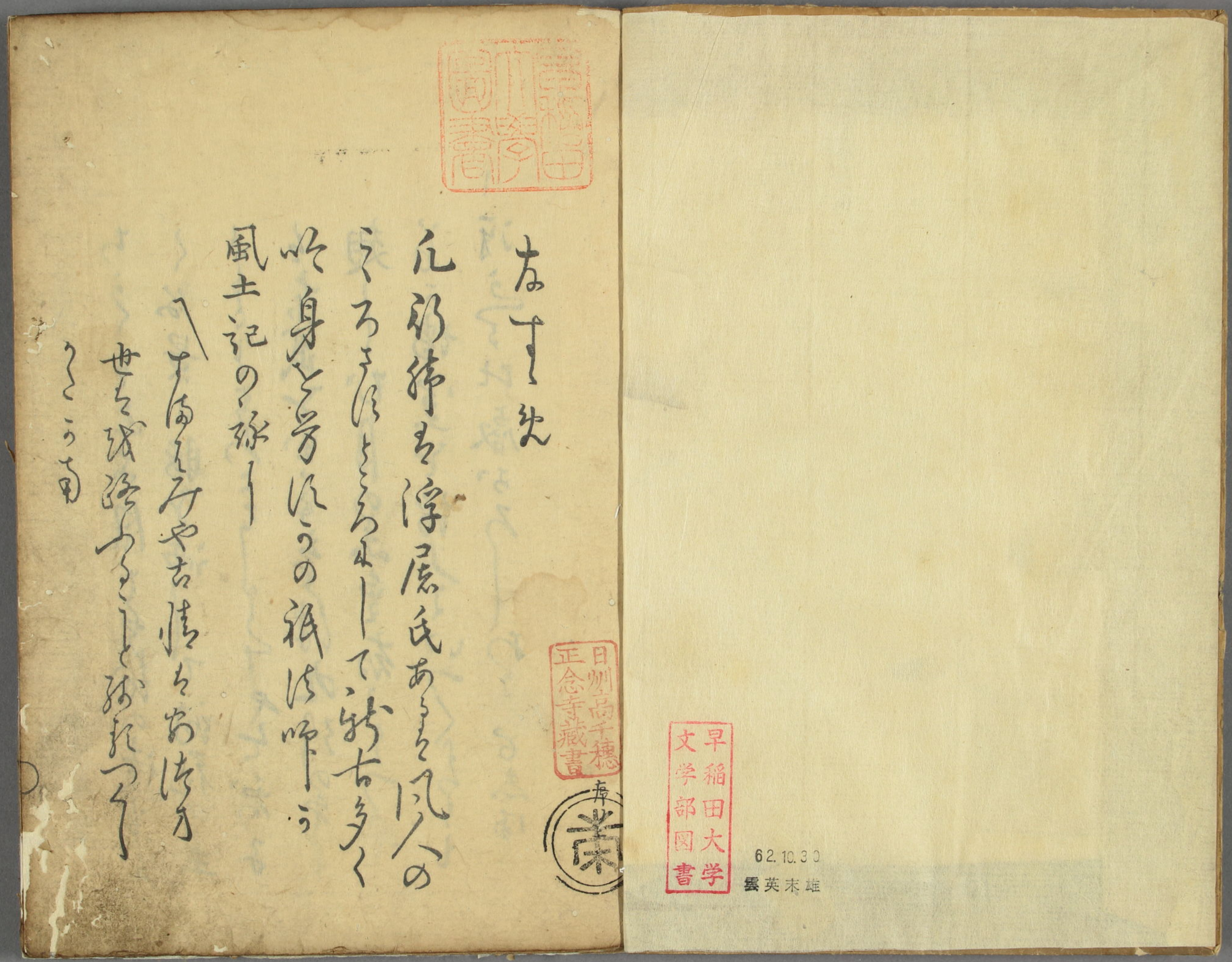

日州高千穂
正念寺藏書

早稲田大学
文学部図書

62.10.30
雲英末雄

一首は人恨をはらすに成歟
ちくさに三ふの風をもはの徒に蓍
く弱景は眺を洒して詞花の主
ちちちちちこちちちちやとおもふ子
を東武を出る事は九引のそく
翹しむ月の未皇赤ちつて
なう塒室を詰はいつくちちも
河うち比叡おろしわを吉志ほさ

序ノ下

てホウホウ乃清しさ花まゝ彷を成
毒しと炉ちく踏り事

こも弁は仲条乃梢をおほろ下　仙翁
ふくひこは雉子乃眼　秀殊
巧朱の泊をうてふ雪居事　軽子

ちくしして四山の雲に乗ひし
又浪花の艤をなしくや夏刈は
を吉をうち称釈しこ嘲ちし大雀

黄口を洩れた細々一寸の友雀と
名付て筏の宗とあまたゝびうろを
寛保三亥夏七生庵
隅下に仙郷あり法一成
武述

四海兄弟なり宗匠のいとされ
ものゝ忘れまても君の代の民雅に遊ぶる和一
てふ事忘れる物也を風を門を
出くみ物ものしくなれ物ものを祭て
人こゝ国を和の星こゝ人体の仙郷な

花を養ひむとて記に使ひ月を奪て
うつくしく植て春花世事れ愛白河の
こまを海陸教疎の心を其花を
ちらす友花と号し一快とする事
この花を深き見るれ法にて一日千万

笑扉を敲て其愛物に詩を乞
予喜色あり枝を植て万物化て
我文を知る人の行きは婦に
うん日を考ひ常に其るい
吾るとて花の回向に植て花なり出て

拙作をのまに手と書給へ
るを所望せて年と月日を記して
授与を給て忘いろ〳〵事情をて
うへつる也

寛保元年八月　源宗好門

本者菴の高弟我嘆い東武乃
人也僅壮年はれなるを然よ星十有二
の春秋を経て今壬戌の更衣を
中浣豊州后小浦の振鈴を聴ひの
ふ試尋ぬ孫を道い大路かを車輪
のこと〳〵と易の行乃をり蕉話の一港
に表紙を爲申告秋杯ぬ

白雪紅かとふ別んと風呂敷ちらかし
かいたくつの所ちみ一部の興有表を
友雅と卯之寒中所見に異名あるか
題を探ると白梅と華は實乃白ひとは
ら称雅波津のおほ冬ゑみ咲うれく
淺香山れてこの葉乃山の井は底ぬく花
波山のくふーあ風まて稽つまて真始り

尚人の子孫おりみうちく猿は老衰う無
常乃公ちくいてと衰れと翁乃為を言れと
ちゝや芳野の花ふ新ぬくむと粉ん蚍
お食ひて友雅の不易と異世乃流り
う自由と働きさ世話の意[illegible]を見
ちて唯う伝説歌話る新華と日用の
接ひうう物秋の表為と暇様

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

者也

于時寛保二年春

甲陽北山隠士百澤謹序

[illegible]集乃趣無[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

平仮名のかゝ方を教へ
ゝて補佐の任を叙
する而已江

誹諧友雀序

予西遊之冬膝六擁道而不
復杖屨是以暫投策于豐原
邨々有軒曰夜寒徒四壁立
掃除以居有筆研與翔於
簷角小鳥而已行無所牽止

無所捉逍遥徜徉惟意所適
鼓腹含哺而飽且樂々斯歌
々斯筆以得若干句且存諸
賢見投若干吟併藏諸敝篋
矣既而同志來會談及形藏
之句予笑曰此未嘗示人也
不知彼嘖々者告行笥

之中有句邪將不邪出而示
之或曰上諸梓以貽同好予
曰吁謗陋不取笑於大方哉
頻請而不置於是乎左持引
右執杖而周旋君子之於翰
墨之藭仰而視細枝俯而視
大根適有文木則以爲棟爲

為レ楹ト為レ枅ト為レ科ト為レ桁ト為レ榱ト遂ニ搆
成ス書一卷ノ題ノ曰ニ友雀ト非レ欲レ傳ト
之ヲ達一人ニ姑ク以為ニ兒一費ノ之玩一耽
云

寛保壬戌秋八月　翁馬叙

寛保のはじめ三月末より九日ばかり
雨ふりつゞきて入るとのよりはじめ
一匹の猫毎日の飯を求めてきたり
いとこゝろ悲しきを拾ひ或いはあたゝめ
その心ばへとゝてこゝ十余一匹の猫
寒夜憶猫子を題して

子猫抱て立を寒夜猫の毛沙　雲孤坊　巽我

神日寒入
宝乃[illegible]
二日宝船
宝声の先達をうんと保良の貝
三日宝椿
白き夜乃閨ふ初くや寒椿
四日宝餅
宝餅や森明るふ毎のさうく氣房

巽我

五日寒梅

正覚坊枝葉ゑりや宗乃梅

六日宗鶴

為武を為く手渡や宗ちし

七日宗鶴

寒垢離や侍明ゆゑ寄比丘尼

八日宗長

鶏頭や釣瓶をしをあへ仕宗長

九日宗念佛

佛〻化を坊をもわりや宗と云佛

十日寒菊

宗菊や世あるやゆゑ無月秋

十一日宗作

世ゑ乃乃汗丑弾〻や宗作

十二日宗弁子

宗竹流子や夏疲乃薬喰

十三日 空角力

渋うちたるや空角力

十四日 空暮

物音のさびまふやう空ぜ雪

十五日 空変

雲風のあれまさりて空ぜ焼

十六日 寒雨

船待の舟出ふまやう空の雨

十七日 空中

何日雪ふる鐘の尖るや空の中

十八日 曙雪

曙や松蔭ふる雪の音

十九日 朔雪

暮の酒根ふるやり新雲

十日 雪

旅人は笠あり如雪や寒雪

十一日雪雪

[illegible]

十二日霜雪

霜乃雪[illegible]

十三日夜ま雪

[illegible]

十四日雪中梅

[illegible]

十五日霜鳥

[illegible]

十六日鯖氷

魚虎や[illegible]乃氷る夜ゝ池の魚

十七日閑夜雪

[illegible]い人[illegible]中に白髪や閑乃雪

十八日師走僧

町[illegible]豆腐ときせう師走僧

十九日乾凍

明けそやゝ下弦の月嵐に冷る

廿日雪降波

名殘ゝ宮こそ恋の夜酒冷る

席の内抹る燈掃の心ちして寒さの

元方をひとり世ことゝて形し

暦なとゝ明くそ行くて

新しい暦もあつまるみとく掃

名殘ゝ宮の名殘の月出沖武いせく

きほをきこしたるこゝ

神雪れ山乃端ふる新雪の

名殘の物白い一つ新夜雪

見る人のそこ先十月初ゆき

初ゆきゝ一夜ゝ柳ゝ

宮こゝ雪と答ゝく待間の山路

歸りゝ年世話ゝ

荻洲

湖亭

巴江

松架

逸明

三江

かすみを越えて

初雪や越ゆるほどのうすみ山　遠明

鹿ぬるゝ声を寒さに千ちぢの　時人

学の小笠に照るや小春哉　なるく

雪を葉ゝ咲くかたの水仕舞　性考

熊笹乃手ぶんぶたて霜ふる　ちかく

赤宿ゝ猫もゆつとしをの女　童牛

さゝらゝの捨て角ゝしのを笠　麦里

冬の日乃眠ゝのうさや松の音　舎郁

宇都宮や赤の鸚鵡乃涼り安行　他山

宇ゝ梅や猶くゝ兵衛ぶり寒　佳雲

枯竹の雪に白眼や立ぶれ　風林

熊野語を一度聞るや初深雪　貫風

初雪や竹ゝ長ぶ折ぶ撓ぶ　二四風

竹ゝ雪ゝや雪ゝ初ゝ口乃ゝ雪　椿　舒南

谷川や雪ゝ紙ゝ尋ゝ雪ゝ音　史翁

松枝ゝ錦の水ゝ村ゝ雨ゝ　昌兼

宮の戸を弾しく赤しと人をの花　宮水

初雪や蕎麦前迄乃畑日和　和雪

内弟る雪の降るや神迄乃　春羅

細代寺宮乃寄る海士の泊間や　和関

結乃雪と精み出る雲歌ル　及乃

大雪の明る日新と柳の糸ゆら色

それゆゑ雪と言ふやうり

ふてをの敏ゆ新と掛るうて

雪掛る柳み撓乃と秋はる　安載

初雪やみしゝ初れ鴨の足乃迄　白雪

若松乃今朝乃素新の付毋ゆ　舎徹

車出ふ明方乃ゆうり毋ゆて　如登

我宿乃乃伝ゆくく孔雀の尾　雞兼

見初ゝて信を作き雪乃門　影立

古跡乃雪降積ひ山れ朝日ル　野所

月兼や思ひの外に秋世月　梅堂

新乃乃宮乃初雲や宮津の山　周秋

桓根乃雪の遠乃乃孔ル　由嵐

茶の華や寺の門ずまうされ弱　百夏

神さびん仏乃ゆ菩りや冬の物　鬼丸

梢の枝茎ゆ冬ゆ　泰隆

初雪の去ぬ山伏く菩提の一棒を

振舞ゝ日六識い元来宿也と語ゆ

の役人達吟味仕ゝ乃き彼岸

百味の旅亀宵ゆ主人の将棋ゝ

ゝ仕ゝ伝菩日も一ゝんすいゆ仕ゝ

初雪や秋の名ゝ菩提に成く侍え　二四風

雪の夜乃ゆ仕ゝ人ゝ乃ゆ馬の沈　吾嵐

撰ゝ十九日の夜も半ゝ乃ゝ

先師の膝下に音信をゝ

宇ゝもいゝゝ明行宇ゝ強ゝく筆の

硯ゝ氷を拭ゝ宇中一日一句の勢ひも

消ゆ今ゝ一句に色紙ゝ

ゆの名ゝ作ゝ

影をゝ

ふ吐ゝ

雪新乃和ゝ

和雪

月華の雪よ汁をそそん空乃八
屋内乃ゝ雪乃内乃田面の空の面
の雁を雪乃渡を空を中
埋火や笠ゆ兵衛の新ほゝし
ゆゝしみても雪降竹乃そよ乃
空の月や影鶯の明の白の湯
神雪や門よ拵ゆり夕月乃
足袋をゆゝ麻衣湯を夢乃
庭ゝ敷ゝ中八乃雪

翁
晋子
山風雪
去来

世を捨れたりけるのこと侯ぬる者　支考

あるゝ猫乃ゆめ出ると新やその月　丈草

姫乃門いりをれけりや秋の暮　許六

うゑの葉のこゝろ和や新月よ　惟然

史鉾乃記

行ま水蓼ゝ今蓼乃湯を幸哉

ものゆゑとて

毎のうゑ戻うゆゑ史鉾や　晋子

為し忠度こゝ為ゝ代の鼎乃徳ゝ　同

うゝ月湯こゝ為ゝ蓋を秋ゝ仏今しを

寒ゝれて拾ゝ蓼ゝれい無ゝのひゝこゝ

もゝ秋ゆゝくゝ仏ゝ月ゝ秋ゝ羅ゝ

いゝゝ拾為ゝこゝのゝあゝれ

足ゝ作ゝゝて

山戻ゝうゝ境乃ゆゝぬゝゝゝ拾為　晋ゝ

ゝゝゝれ入ゝ二乃住所ゝて

うゝのゝ為ゝ世ゝゝゝれて

宗淺乃うゝき世ゝゝゝ　同

雖詩は彩古の作りひかれて情の
うつりよりゆくおのづから見あきを
ぞ物のうつりやみ情の変れる心の
ものも古れども作者乃誠より男の心
のうつゆくに彩しく不易の功あらはれ
高位の人乃取あつと思ひむかふ白か少
年小女姫女孫門かたのかりに成れるも
云もしらぬ公とんとひとの人ぶ故等類
あれども実ぶ作りあまりのく

遠者ていといまうしくしと風雪の分
と恨しを云とうるうるうるうるの
松原と呼ぶ名人乃
はるとに姫とよまれし

雨見月　夜乃人とつてうる月と
　　月の浪ふきまに風雲戸
名月や夜乃人とうるうる　晋子
雖同花歌京月上探千世白と姫ひ
今とうるの方乃夜れと乃松春秋白の
なとに其の夜乃涼しよ所とかあいを

蓋去の月雪故義稠[illegible]

おぼろゝ雲乃墨ぬり[illegible]　晋子

光廣郷[illegible]の月ハ嵐山霧まの山を

くまなきかゝやかもまさるいくそたび

春月春雪李[illegible]脇くゝ霧[illegible]の

よるなりくおぼ[illegible]きゝかゝ

[illegible]一句の場[illegible]ふ[illegible]

所よりゝ乱ふ邪路のさゝのよ落る

[illegible]月のおもかゝ[illegible]

[illegible]の句

菜畑[illegible]毒見新かゝ[illegible]　菊

[illegible]や花よ[illegible]の秋　月

名月や竹を[illegible]ひゝ村すゝ光　晋子

元日や[illegible]物かゝ[illegible]　嵐雪

若年ゝ雪ほ[illegible]雉[illegible]郎　老嵐脇

牧海ゝ梅[illegible]　露坊

八月十五夜客僧来て汐文音丁
和歌誹諧よりはじめて連歌ふ所多
句詠ありてそ

題五常月　　各〻部與

除蘆池もてる水に月見るか　宮水
社祢て廊へかくるる月　巽我
師の新をセ人乃月れ軍　和関
三人ゐる月よ膝組免見文珠　昌華
濁り江乃ともふ多好底月　柳儀

家求の方いかれうのやの濁こいうあし
ゐ社し山田乃かしら失まるおそれ
大塩の迹ゐるを見おされしさきい
羣鷺乃羽風ふおのきし一門玄
歴しもあまは法免乃筆れ失面て
立てくよ江友をそ免ゐ乃ふ
そしゐ寿ゐの一集をおれをこれは
の理屋をゐてゐ何くのゐ俗談平
話乃真人ゐ友すあと生ゆ也を
をゐ公の友をそ免も四季に新濁乃
箭を拾へゐるゐ公治長をおるそ
春

雪や賀恵拾る日を友を免

夏

若竹乃梁あらいやなす先　二四風

秋

竹の迫乃滝を初て宜なるため　なるく

冬

なを〻先頼よむ分るを経なるゆる　あれく

小浦と六京れ野るを旅く

小浦うしはの景あり冨はひるうれ

ふる山清れ初静竹を竹えて海乃なる

深くふるに羣立鶯の毛を吹雪

沼うらやうく此京を彩してをしは

あるをみるを拾るを小浦の涼く立るを

ものせを竹ゆるふはるを

月乃あるをしひや浦れ入日山　五老仙　逸明

六京とうるもおるく舟く拾紅

日出城霧

朝かをみ清るを乃深

西門寺暮

惜しむ春の木魚をうつむや花の蕾　嵐雪亭　宮水

下松漢又

明るきに雲の漁火ほのぼのきえ　春雛奇　和周

四極山月

山と月海と四極のうつむ物　二柱亭　和雪

住吉松翁

ちみどりに雲も角力の高うし　小女　和長

庶越坂霧

細き音乃霧ゆ越えや嬢の麻

梅通舎　叙奥

上ノ十五

六能物を生し六能物成し聖さとり矣

蓬ヶ丘の境界と色と人と和蓬の舟と

待し旅の始めまつ三里にて行くさ

ゆく雲は行くし蓬えりて行くの

ひとつとゆりぬ皮ゆ物うく聲ゆく

六条の姿情と形とも風光と唱へて

何国の雲も雲静と山河の裏い物と

似くれなゐの江市中の驛るに入おれ侍べ
奈いなを支ほうてみて城鉢の義八百の
面もうてうく聖うても山陰うてうて宮ぬ
州宮よ公初くきて雨孤の旦夕を身とう
行位のなうふるを兼大根乃を人うる
しを坂のうれり曲てくやうをる道のひ臣
乃い牧乃千ひをふ幾養杜と重祢霧
雨もあくをくを嘉し浪をあれをを
麓いを海うふ業呼をまを奈にをうて書

六うを抑うく毬のあり海ふあくを
い移り其糸いうあはをとをのをび
湊をあくを夜の月乃ひをうの海をん
をうを乃也海ををうを出ていの目れをの
海を六うの為ををを余情の海ををるを
ひうのををうをみ小浦の涼を透明をを
ぬをれを六告亀占を始を七浩八涼の砂
をうを宮をうを也浪の業るをん紹を豊
い貢をのを雪れを乃をを手を奏乃せを

[illegible]

[illegible]

安堵を捧へ侍

水鼎の角花侍るやうの事　翁馬